



## 収穫レポート 2002年

コノスル チーフワインメーカー アドルフォ・フルタード

自然の働きについて、人間がとやかく言うことはできません。2002年はチリにとって例外的な収穫期となりました。この年は、大変な、しかしながらその分素晴らしい結果が得られた、試練の年として記憶されることでしょう。葡萄畑での働きは、ワインとなって報われるものです。葡萄にとって適切なタイミングで正しい判断を下し続ける地道な努力が実り、コノスルは見事2002年の試練に打ち勝ったことを、喜びとともにここにご報告します。

2002年の収穫は、特別なものとなりました。チリは普通、発芽から収穫期までの降水量が非常に少なく、理想的に乾燥した環境で葡萄が成熟する、葡萄栽培にとっても適した土地なのです。そのため、今年の4月初めに雨が降った時には、我々スタッフは少なからず動揺しました。しかしながら、今こうして振り返ってみると、この雨がクリコ・ヴァレー(南緯34°、チリの栽培地の中央にある栽培地)を中心に、チリの全域で気候の変化が起こる前触れだったと分かります。

### 3月から4月の労働

コノスルの畑は全て(後程言及するピオピオ・ヴァレーは除き)、クリコ・ヴァレーの北側にあるため、それより南側で起こった最悪の事態を免れることが出来ました。マイポ・ヴァレーでは降水はとて少なく、カサブランカ・ヴァレーではほとんど降りませんでした。

収穫は3月6日、チンバロンゴのシャルドネからスタートし、4月23日のマイポのカベルネ・フランで幕を閉じました。3月は雨も降らず、例年通りのスケジュールで過ぎていきました。白品種とピノ・ノワールに関しては、理想的に熟していた程です。

素晴らしく熟した赤品種を前に、4月には前述の不穏な雨雲が現れました。当時は、それが実際には一部のダメージで済むものとは思ってもみませんでした。我々の作業量は倍になり、雨をやりすごすのに神経をすり減らしました。その努力の甲斐あって、最終的には収穫期の混乱が嘘のような、凝縮した素晴らしい葡萄が手に入ったのです。

こまめな畑の管理に関しては、コノスルに一日の長があります。適切な日光量、適度な保水。畑をコントロールする努力に加え、春から夏にかけての晴天により、2002年は葡萄が早くから理想的な成熟を見せていました。いかなる雨も、この努力の成果を流し去ることはできません。我々スタッフは祈りつつも待ち、慌てて収穫を急ぐようなことはしませんでした。

### ピオピオ・ヴァレーの希望

このようにして収穫した葡萄は、健康な状態だったので、私はさらに幸運を信じてみようと思いました。冷涼な気候で葡萄が見事に熟していたからです。私の経験則からすると、今年は健全で一層エレガント、魅力的なアロマと、熟成向きのタンニンを用意したワインになるだろうと思います。

ピオピオ・ヴァレーでは、全く状況が異なっていました。しかし、蓋を開けてみると、例年通り見事な収穫になりました。チリの他の栽培地域と違い、今回のようにピオピオ・ヴァレーに雨が降るのは、何も新しいことではありません。ピオピオ・ヴァレーは降雨と、保水力のある粘土質土壌が特徴なのです。まだあまり開発されていないこの地は、冷涼気候を好む品種に適したテロワールを持っています。2002年はしっかりとしたゲヴェルツトラミネール、ピノ・ノワール、そしてコノスルとしては初となるリースリングの収穫がありました。早くリースリングを醸造し、ピオピオ・ヴァレーのトレードマークになるであろう、綺麗なミネラルを感じ取るのが今から待ちきれません。

## 結論

まとめると、今年は興味深く、難しい収穫期となりました。例年以上の作業と、細部にわたる一生の注意が必要とされる1年でした。今年のワインの中で、強いてひとつだけお勧めするとしたら、私はマイポのカベルネ・ソーヴィニオンを選びます。凝縮し、力強い色合い、しっかりとした香り立ちがありながらも、微妙なニュアンスを表現できているからです。

カサブランカのシャルドネも将来性を感じます。我々が慎重に選別したテロワールからくる、緊張感が感じられます(カサブランカ・ヴァレーの中でもとりわけ冷涼な地域を選び、シャルドネの樹を植えたのです)。今年の収穫は、大健闘したピノ・ノワールで幕を閉じました(白品種とピノ・ノワールは3月と4月の冷涼な気候に適します)。我々はピノ・ノワールの出来には自信を持っています。それには多くの理由がありますが、そのうちのひとつとして、「20バレル リミテッド・エディション」ピノ・ノワールの完成度の高さが挙げられます。そして勿論、ラペルのメルロー、シラーは、例年通り素晴らしい出来でした。